

農作物技術情報 第4号 水稻

発行日 令和8年6月25日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用
二次元コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ 目標茎数を確保したら、直ちに中干しを始めるとともに、溝切りを実施しましょう。
- ◆ 今後の気象予報や生育ステージに応じて、計画的な水管理に努めるとともに、いもち病・紋枯病、カメムシ類の発生予察情報を確認しながら適正な防除を実施しましょう。

1 生育概況

生育診断予察ほにおける6月24日現在の生育（県平均）は、草丈が37.2cm（平年差-6.3cm）、茎数は380本/m²（平年比87%）、葉数は8.3葉（平年差-0.3葉）、葉色値は40.0（平年差-1.7）と平年を下回っており、地帯や品種により生育に差がみられています（表1、表2）。目標茎数を確保したほ場では中干しが始まっています。

表1 【地帯別】 6月24日現在の生育（農業改良普及センター生育診断予察ほ）

地帯名	草丈			茎数			葉数			葉色（SPAD-502）		
	本年 (cm)	平年 (cm)	平年差 (cm)	本年 (本/m ²)	平年 (本/m ²)	平年比 (%)	本年 (葉)	平年 (葉)	平年差 (葉)	本年	平年	平年差
北上川上流	34.7	40.6	-5.9	298	403	74	8.0	8.3	-0.3	38.3	42.7	-4.4
北上川下流	38.4	44.3	-5.9	410	444	92	8.4	8.7	-0.3	41.1	41.4	-0.3
東部	38.2	45.3	-7.2	412	413	100	7.9	8.4	-0.5	38.8	43.0	-4.2
北部	32.5	45.3	-12.8	369	463	80	7.8	8.5	-0.7	34.8	40.9	-6.1
県全体	37.2	43.5	-6.3	380	435	87	8.3	8.6	-0.3	40.0	41.7	-1.7

- 1) 平年値は原則、令和3年～令和7年までの5か年平均
- 2) 数値は端数処理を実施
- 3) 県全体の数字は、各地帯の作付面積比による加重平均

表2 【品種別】 6月24日現在の生育（農業改良普及センター生育診断予察ほ）

品種名	草丈			茎数			葉数			葉色（SPAD-502）		
	本年 (cm)	平年 (cm)	平年差 (cm)	本年 (本/m ²)	平年 (本/m ²)	平年比 (%)	本年 (葉)	平年 (葉)	平年差 (葉)	本年	平年	平年差
ひとめぼれ	37.1	43.2	-6.1	393	437	90	8.7	8.8	-0.1	40.2	43.6	-3.4
あきたこまち	30.6	37.6	-7.0	329	385	85	7.8	8.1	-0.3	41.1	43.9	-2.8
いわてっこ	32.1	39.8	-7.7	367	456	80	7.7	8.0	-0.3	36.6	39.9	-3.3
白銀のひかり	37.2	47.8	-10.6	324	414	78	7.8	8.8	-1.0	35.9	41.1	-5.2
銀河のしずく	42.0	48.9	-6.9	397	440	90	8.3	8.7	-0.4	39.4	41.6	-2.2
金色の風	39.7	44.3	-4.6	488	492	99	9.4	9.2	0.2	43.6	43.1	0.5

- 1) 平年値は原則、令和3年～令和7年までの5か年平均
- 2) 数値は端数処理を実施

2 6月下旬からの水管理

(1) 中干し

【中干しの目的】

- 過剰生育にならないよう制御する
稲体の窒素吸収を一時的に抑制することにより、過剰分けつの発生・下位節間の伸長を抑える。
→ 稈長の抑制、穂数・籾数の制御（収量・品質の安定化）
- 根を健全化する
還元状態の土壤に酸素を供給することで、硫化水素・有機酸等の有害物質の発生を抑えるとともに、根の活力低下を防ぎ、根を深く伸ばして後期の養分吸収・登熟を良好にする。
- 地耐力を確保する
コンバインによる収穫作業を効率的・効果的に行うため、田面を固くする。
- 温室効果ガス（メタンガス）の発生を抑制する
土壤を酸化的な状態とし、メタン生成菌（嫌気性菌）の活動を抑制する。

ア 中干し時期（6月下旬～7月上旬）

茎数が目標穂数の8～9割に達したら、直ちに中干しを行ってください。

極端な生育不足がない限り確実に中干しを行います。

なお、分けつの発生が遅れている場合は、茎数確保までは浅水管理を継続するとともに、強度の中干しは避けましょう。

〔参考〕 m²あたり茎数の目安（目標穂数の8～9割）

- ・ 「ひとめぼれ」 420本前後
- ・ 「金色の風」「銀河のしずく」 350本前後
- ・ 「いわてっこ」 内陸：390本前後、県北・沿岸：370本前後
- ・ 「白銀のひかり」 350本前後

イ 中干しの程度

- ・ 細かい亀裂が生じ、軽く踏んで足跡が付く程度まで乾燥させます（図2）。
 - ・ 落水を促し、中干しの効果を高めるため、溝切りを行います（図3）。
 - ・ 十分乾いたら、1日湛水→2日落水 ⇒ 2日湛水 → 1日落水 と落水間隔を徐々に短くし、幼穂形成期頃には湛水管理とします。
- ➔ 根腐れ防止のため、中干し後の急な湛水はしません。



図1 中干しの目安
(軽く踏んで足跡がつく程度)



図2 溝切り

ウ 中干し期間の延長

中干しの期間を従来よりも1週間延長する取組は、温室効果ガスの排出削減量を国が「クレジット」として認証するJ-クレジット制度の対象技術で、平均で3%程度の減収が報告されている一方、登熟歩合の向上やタンパク含量の低下などの品質の向上が報告されています(図3)。

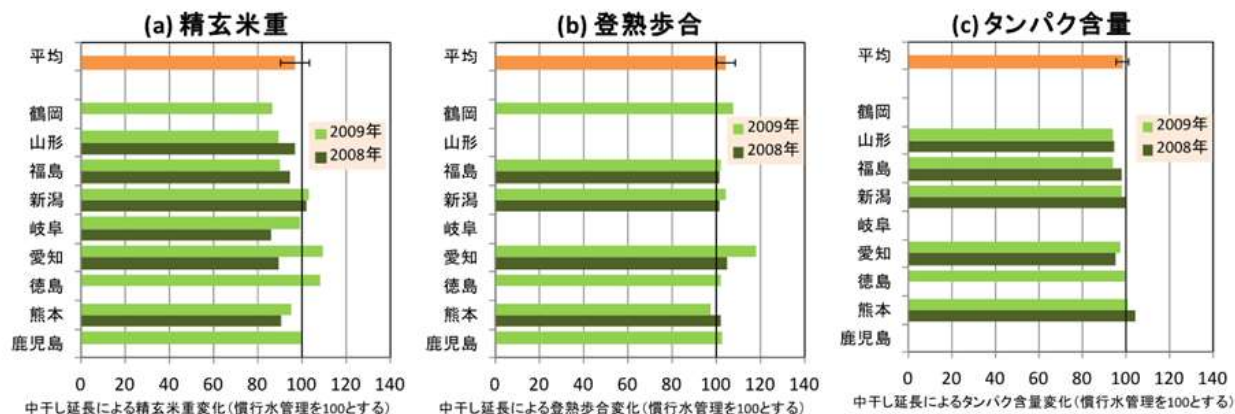


図3 8県9カ所における水田メタン削減試験における中干し延長による収量・品質の変化
(※出典「水田メタン発生抑制のための新たな水管理技術マニュアル」 H24.8 (独)農業環境技術研究所)

中干し期間の延長は、水稻の生育への影響もあることから、実施する際には以下の点に注意してください。

【中干し期間を延長する際の栽培上の注意点】

- ・ 過度の土壌乾燥などが減収に影響する可能性があるため、水持ちの良いほ場を選び、強度の中干しは避ける(図4)。
- ・ 水持ちの悪いほ場(減水深3cm以上)や生育が遅れているほ場では、中干しの延長を控える。
- ・ 茎数を早期に確保し、幼穂形成期頃までに中干しを終える。
- ・ 気象予報により、幼穂形成期に17℃以下の低温に遭遇する恐れがある場合は、中干しを終了し、冷害対策の前歴深水(水深4~6cm)を優先する。



図4 強度の中干し

J-クレジット制度の「中干し期間の延長の取組」の詳細については、岩手県ホームページに掲載していますので御確認ください。

<https://www.pref.iwate.jp/sangyoukoyou/nougyou/seisan/kankyuu/1087190.html>

(2) 幼穂形成期～減数分裂期の水管理

- ・ 幼穂形成期からは、水深4～6cmの深水管理（前歴深水かんがい）とします（図5、図6）。
- ・ 減数分裂期前後は、根の健全化により品質・食味の向上を図るため、間断かんがいを基本とします。低温が予想される場合は前歴深水に引き続き水深を確保してください（図5、図7）。

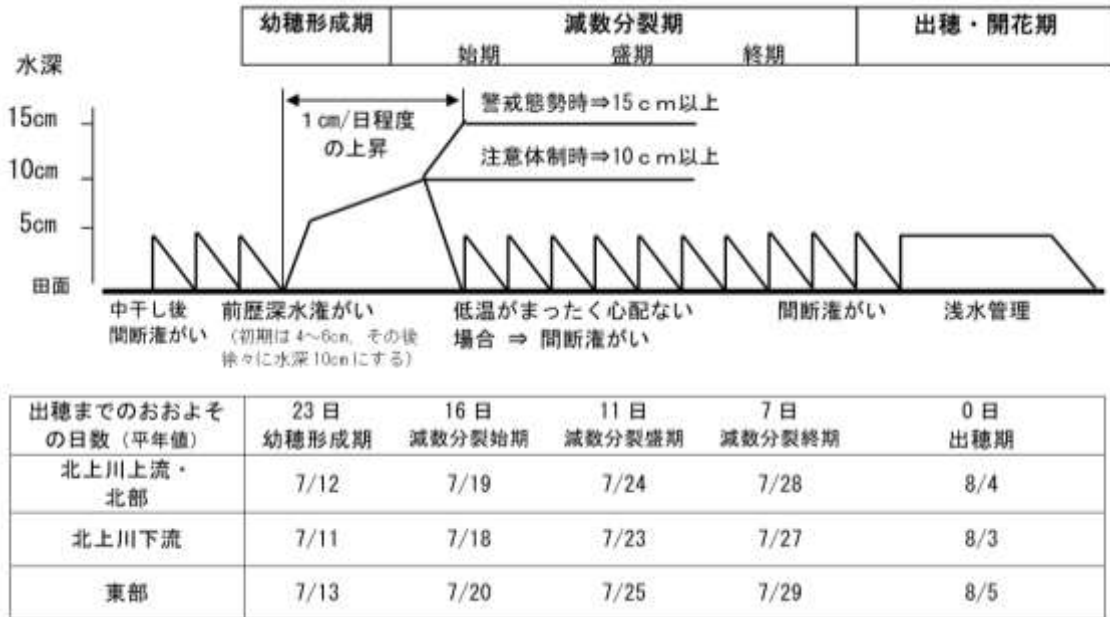


図5 中干し後の水管理の模式図

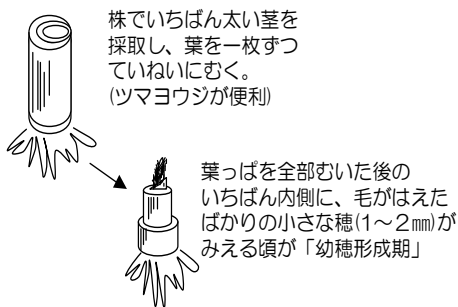


図6 幼穂形成期の判断

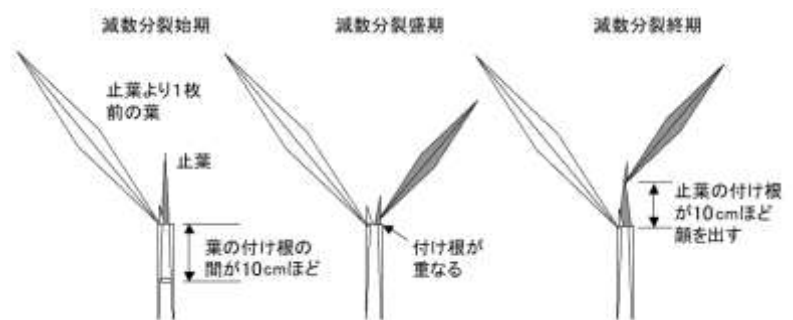


図7 減数分裂期の判断

3 追肥

今後の追肥判断のためにも、葉色の変化に注意が必要です。良食味米生産の観点から、品種、気象・生育状況を見極めて、適期に適量を施用します。詳しくは各地域で発行される技術情報等を参考にしてください。

4 いもち病対策

(1) 葉いもち防除

葉いもち（図8）は、気象条件により急激に広まるので、ほ場の観察と早期防除を徹底します。

ほ場をよく観察し、発生を確認したら、葉いもち予防粒剤（箱施用剤、水面・投げ込み施用剤）施用の有無にかかわらず、**茎葉散布を実施**します。



図8 葉いもち

(2) 穂いもち予防粒剤を散布する場合の留意点

- ・ 生育ステージをよく確認し、ラベル記載の散布時期を逸さないよう注意します。（生育ステージ…幼穂形成期：出穂23日前、減数分裂期：出穂11日前）
- ・ ほ場をよく見回り、葉いもちが発生している場合は茎葉散布してから粒剤施用します。

5 紋枯病対策

- ・ 茎葉散布による防除は、穂ばらみ末期（7月末～8月上旬）に、畦畔際の発病株の割合（発病株率）が、早生品種で15%以上、晩生品種20%以上の場合に行います（図9）。
- ・ 前年発生が多かったほ場では、予防粒剤による防除をします。



図9 紋枯病

6 斑点米カメムシ類の防除対策

(1) 防除のポイント

- ・ 斑点米カメムシ類の増殖源となる畦畔、牧草地、雑草地、農道などでは、イネ科植物が出穂しないよう管理を徹底します。
- ・ なお、養蜂活動が行われている地域で殺虫剤を散布する計画がある場合は、養蜂家と協議のうえ、散布時期を事前に通知するなど、ミツバチへの危害防止に努めてください。

(2) 耕種的な防除対策

- ・ 斑点米カメムシ類は、畦畔や転作牧草等のイネ科植物が発生源となるため、水稻出穂の15～10日前までに地域一斉に草刈りを実施します（図10）。このときに、畦畔やほ場の入口に雑草の刈り残しがないよう注意してください（図11）。
- ・ 水田内の雑草も斑点米カメムシ類の増殖源となります（図12）。ノビエ・ホタルイ類・シズイが多発しているほ場は、中・後期除草剤の使用等により、増殖源となる雑草の除去に努めてください。



図10 畦畔雑草が伸びている状態

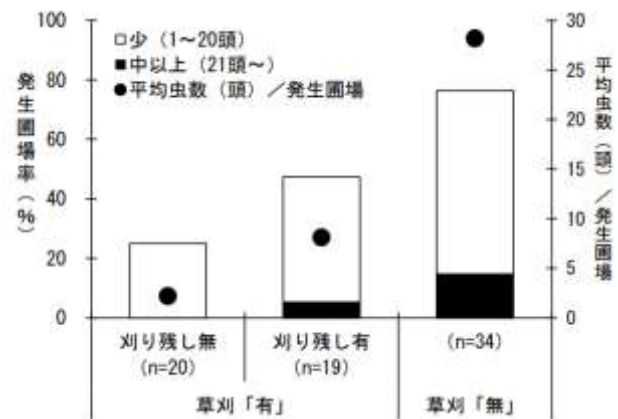


図11 畦畔除草の実施内容と畦畔のカメムシ発生圃場率との関係

※ 刈り残し有：畦畔や圃場進入口の一部に出穂したイネ科雑草が存在している状態



図12 シズイの花穂とアカスジカスミカメの成虫

7 直播栽培の本田管理

(1) 生育中期の水管理のポイント

- ・ 鉄コーティング湛水直播栽培は茎数過剰となりやすく、表面播種のため倒伏しやすいので、ほ場をよく確認し、目標となる茎数（点播で60株/坪の場合は概ね20～30本/株）に達したら、直ちに中干しをおこないます。
- ・ 中干し後の水管理は移植栽培に準じますが、穂ばらみ期に17℃以下の低温の恐れが無い場合は、「穂ばらみ期落水」で田面土壌硬度を高め、倒伏を軽減する対策を検討します。

(2) 病虫害防除

ア いもち病防除

(ア) 葉いもち

発生時は、移植栽培の防除体系に準じて速やかに茎葉散布を実施します。

特に「ひとめぼれ」などの晩生品種では、穂いもち予防剤の散布適期前に発生する場合がありますので注意が必要です。

(イ) 穂いもち

予防剤の水面施用（出穂20～10日前頃）、または出穂直前と穂揃い期の2回の茎葉散布を基本とします。

イ イチモンジセセリ（イネツトムシ）

飛来性の害虫で、例年発生は少ないですが、生育後半に葉色が濃い場合や、出穂が遅いほ場では大きな被害を受ける場合があります（図13）。こまめに観察し発生に備えます。

ウ 斑点米カメムシ類

畦畔の草刈りや除草剤の使用等による水田内の雑草の除去など、移植栽培と同様に防除を実施します。



図13 イチモンジセセリ幼虫

(3) 追肥

- ・ 耐倒伏性が低い「ひとめぼれ」「あきたこまち」「いわてっこ」等では窒素分量は移植栽培の基準よりやや控えめとし、様子を見ながら加減します。
- ・ なお、明らかに生育過剰と判断される場合や、中干しが十分できなかった場合は、「穂ばらみ期落水」又は倒伏軽減剤の使用も検討します。

ツキノワグマの出没に関する警報

県は、ツキノワグマの出没に関する一層の注意を促し、更なる被害の防止を図るため、県内全域に「ツキノワグマの出没に関する警報」を発表します。県民の皆さんにはツキノワグマの被害を防止するため、一層の注意をお願いします。

<https://www.pref.iwate.jp/kurashikankyoushizen/yasei/1049881/1043255.html>

- クマに遭遇しないために
 - 事前に入山地域の出没情報や被害情報を確認する。
 - 音の鳴るグッズを常に鳴らして存在をアピール
- クマを寄せ付けない
 - 食べ残し等、エサになるものを放置しない
 - 農地周辺のやぶを刈り払い、見通しの良い環境を整備する。
- 出会ったときの行動
 - 背を向けて走って逃げない
 - 目を離さず静かにゆっくり後ずさる
- 襲われそうになったら...
 - クマが攻撃してきたら両腕で顔や頭をカバーし地面に伏せて防御する

次号は7月30日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

熱中症防止

- 日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行うこと。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給すること。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に注意。
- 帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をすること。作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努めること。
- 暑い環境で体調不良の症状がみられたら、すぐに作業を中断するとともに、涼しい環境へ避難し、水分や塩分を補給すること。意識がない場合や自力で水が飲めない場合、応急処置を行っても良くならない場合は、直ちに病院で手当を受けること。

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。

**6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です**

- 農薬散布時は、近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬は適切に保管・管理しましょう